

# 日本IT書紀

## 016 サムライ

02 溟滓篇  
卷之二 鶏子

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は  
<https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第十六

サムライ

一

情報サービス産業にかける情熱をひしひしと感じた人物がいる。その人には、安藤多喜夫氏と前後してインタビューをする機会を得た。

会ったのは、そろそろ梅雨が明けようとするころだったろうか。約束した場所は東京・渋谷の東急会館一階、プレイガイドの前、ということだった。わたしは地下鉄銀座線から明治通りをまたぐ通路を経て、文化会館の階段から降りていった。その人は背中を向けて立っていた。わたしが表通りからやってくると考えたのだろうか。

名木田兵二。

前方から光を受け、背筋をピンと伸ばしたシルエットは、「かくしゃく（豊饒）たる」という形容詞そのものだった。

百七十五センチというのは、戦前生まれとしては背が高い。

筆者に気がついて、名木田氏の右手が上がった。

「やあ」

にこやかな笑顔が広がった。

「ごぶさたいました」

わたしは頭を下げた。

「お元気そうで何よりです」

「あなたも、少しも変わっていない。ご活躍のようで」  
自分をはるか年下なのに、「あなた」と呼ばれるのは面映かった。お付き合いをいただいて二十年以上になるが、筆者が知ったとき、名木田兵二という人はすでに五十歳を超え、国内ソフト／サービス業界のリーダーの一人だった。——現役の当時、この人はいくつ肩書きを持っていたのだろうか。

富士通エフ・アイ・ピーの代表取締役社長であり、のち会長を経て、相談役、顧問を歴任した。併せて一九八〇年から七年間、FACOMセンター協議会の会長を務め、八六年から二期四年にわたって社団法人情報サービス産業協会会長の要職にあった。

この間、産業構造審議会情報産業部会委員、財団法人流通システム開発センター理事、財団法人ソフトウェア情報センター理事など、引き受けた公職は数え切れない。

一度だけ、温厚な名木田氏を怒らせたことがあった。一

九八五年に成立した労働者派遣事業法にからんで、論評を書いた。

——通産省や情報サービス産業協会は技術者の派遣はいかんと言っているが、業界の技術者のレベルが低すぎるのではないか。その意味で下働きの派遣は止むを得ないのである。

というような内容だったと思う。

それを読んで、この人がすつ飛んできた。

「だからこそ、協会は人材の育成と経営者の意識向上に取り組んでいる。いいことばかり書いてほしいとは言わないうが、あなたはそのことを十分に承知しているはずだし、業界のレベルアップを側面から支援すべき業界紙が、業界を叩くだけでいいのか。本末転倒ではないか」

唇が震えていた。

ある意味で、わたしは業界の痛いところを衝いた。業界は表向き「脱派遣」を唱えていながら、実態は派遣で成り立っていた。

——だからこそ。

ともに闘ってくれるはずの同志に裏切られた、という思いがあったのかもしれない。

近くの喫茶店に入った。

本題に入る前の雑談の中で、共通の知己がにわかな病を

得て没したことを伝えた。

それを聞いたとき、一瞬だが、スプーンを動かす手が止まった。その人物はかつて、名木田氏の下で部長として勤めていた。ともに譲れない線というものがあって、上司と部下の関係を超えて議論したことがある、と耳にしたことがあった。

「個性が強くてね。社内でもよくぶつかったけれど、ムライグでしたね」

「名木田さんは、その総大将だったわけでしょう？」

「そんなことはありませんよ」

いやいや気骨は一本通っている。

「で、今日は何を話せばいいの？」

それでわたしが取っかかりを作った。

「役に立つといいけれど」

名木田氏は話し始めた。

## 二

生まれたのは一九一九年（大正八）で、岡山で少年期を過ごしました。早稲田大学に入ったときは、もう東京に引越していました。卒業は一九四一年（昭和十六）の十二月、太平洋戦争最初の繰上げ卒業でした。翌年の一月、富

士通に入ったんです。

富士通というのは、富士電機の子会社で、「富士通信機製造」というのが当時の名前ですね。電話機とか交換機を作っていたんです。

大学の担当教授から、

——通信関係で大企業より中小規模で新しい会社を選べ、というアドバイスをいただきました。先見の明があったんですね。

スタートは工場の総務部門でした。その後、一貫して総務、人事、労務畑を歩きました。四四年から一年半ほど、軍隊に召集されましたが、内地勤務だったので、終戦と同時に復社することができました。

会社の復興に協力する意味から労働組合の結成に参加し、推されて執行委員会の組織部長を務めました。会社との団体交渉に出ましてね、日ごろ可愛がっていた和田（恒輔）社長から「あんまりいじめるなよ」なんて、冗談めかして言われたことがあります。

こういう経験から、経営の要諦というか、人生の要諦というものを学んだような気がします。それは、人を愛し、相手を信頼することなんですな。

東京オリピックの年は長野県の須坂工場で工場長をしていました。翌年、営業部門に配属されたのですが、初め

ての業務ですし、もう四十六歳になっていましたから、がむしやらに仕事をしましたよ。

富士通信機製造は五四年にリレー式の、わが国初の自動計算機「FACOM100」を完成させていました。本格的に売り出そうとしたのは六〇年代に入ってからでした。

FACOM100は富士通信機製造が開発した国産初の実用リレー式計算機だった。四千五百個のリレーを使い科学技術用として社内外の計算業務に利用された。湯川秀樹博士から依頼された多重積分計算は人手で二年かかると思われたが、このマシンは三日で完璧な答えを出した。

岡田完二郎という社長がいますね。コンピュータが将来のデータ通信の一翼を担うことを見通していたんですね。この人が大英断をした。というのは、電子計算機の開発は苦労の連続で、お金ばっかりかかる。海のものとも山のものともわからない。

富士通信機は電電公社が大口の取引先でした。だから電話機とか交換機をやっていたら間違いはないというのに、岡田さんは

「当社はコンピュータに賭ける」と打ち上げた。

「当社はコンピューター事業に賭ける」と宣言した数年後、岡田がある会合で「成功四分、失敗六分」と公言した。

それを聞いた社員は、「社長たちは自分らより先に墓に入るから失敗してもいいだろうが、オレたちは何が何でも成功しなきゃ困る」と発奮したという伝説が残っている。

この時期は川崎工場で小林大祐、山本卓眞、池田敏雄、黒崎房之助などが悪戦苦闘を続けていた。

——小林大祐さんとか池田敏雄さんとかのお名前を聞いています。

そう、川崎工場の猛者たちね。技術部隊には多士済々がそろっていました。

「優れたマシンだから売れ」と言われたって、買ってくれるユーザーはそうそうあるわけじゃないし、わが国の電子計算機はまだ初期の段階でした。それで計算センターを自分で作って、お客さんに見せたり、性能をテストしたり、そのかたわらで計算業務を受託してしていました。

最初は東京の日比谷の朝日生命ビルに「FACOM128Bセンター」というのがあって、それが新橋のハマゴムビルに移転して「FACOM222センター」になりました。見込みのお客さんを案内するモデルルームでもありました。当時は計算センターの役割が大きかったのです。

営業の観点で見たとき、ひとつの転機というのは一九六五年ごろだったでしょう。日本経済も好況が続く、その中で「FACOM230-10」というマシンが発売された

ときです。

——「名機」といわれたマシンですね。

その通りです。

東洋工業から来た渡辺昭雄さんという人が設計しました。この拡販のために、わたしが工場から営業に引っ張られたわけでした。けれどマシンとして優れていても、プログラムがなければ計算機はただの機械ですから、SE教育やソフトが大事というので、一九六五年に日本IBMから安藤馨さんに来てもらいました。

安藤さんというのは、戦前から計算機にかかわっていて、技術者の育成にたいへん力を入れた方でした。有隣電機精機が持っていた計算センターを富士通が譲り受けて、受託計算サービスの「ファコム」という子会社を作っていたのですが、ここに安藤さんを迎え、改組して「富士通ファコム」になったわけです。

### 三

六五年に発売された「FACOM230-10」は、それまでの電子計算機と比べるとはるかに使いやすかった。加えてカナ文字が使えるCOBOL「カナCOBOL」でプログラムを作ることができた。富士通は、一気に市場を

席卷しようと考えた。

このころのことを補足しておく。

一九六〇年代の中ごろを過ぎると、産業界でようやく電子計算機が脚光を浴び、営業戦線は激しさを増していた。富士通にとって計算センターがますます重要だった。富士通と富士通ファコムの調整が、営業管理部長だった名木田の担当になった。

「ところがその富士通ファコムには、一筋縄ではいかないうサムライたちが集まっていたんです」

もと有隣電機の技術者に加え、安藤馨を社長として迎え入れた折、一緒に移籍してきた日本IBMのセールス・エンジニアやシステム・エンジニア、その後を増強したファコムの社員たちだった。混成部隊といっている。

彼らは富士通ファコムに移籍したものの、  
——オレたちが支えているんだ。

という意気込みが強かった。

そのなかに田部雄三という男がいた。

田部は一九三〇年、東京に生まれ、早稲田大学理工学部の電気通信科を出て日本IBMに入った。羽田近くにあった糶谷工場を振り出しにプログラマーとなり、労働組合書記として水品浩や稲垣早苗と渡り合った。その一方、日本工業規格の標準化部会に出てコンピュータ用語の統一に取

り組んだ。

のち安藤馨氏とともに日本IBMから富士通に移籍し、名木田が富士通ファコムの再建に乗り出した当時、電算センター部門長という職にあった。

高学歴の割に角刈りの額に太い眉、ギョロットと睨む目に凄みがあった。

「何をするにも、田部さんの了解を取らないといけない。田部さんは田部さんで、受託計算のお客さんを抱えているから、富士通本社の営業の言い分ばかり聞いていたのでは仕事にならない。そこでわたしが出向いて、スケジュールを打ち合わせ、マシンの融通をつけてもらった」

本社の部長が出向いて、子会社の部門長をなだめすかす。そういう役割だった。

そのあたりの事情について、名木田はこう話す。

「わたしはいつてみれば、裁判官のように、計算業務のユーザーと富士通の要求について、それぞれの言い分を聞いて、調整する面倒な仕事をする立場でした。公平な判断で現場に指示をしたので、何の問題も起きませんでした」

「彼が偉かったのは、引き受けた仕事は必ず実行したし、何が何でも間に合わせたことです。納期は目安という程度の意味しかなかった当時、彼の姿勢には学ぶべきものが多かった。たまたま早稲田の同門ということで、何かとわた

しの顔を立ててくれました」

「もう一つ、田部さんが偉かったのは、FACOMの計算機を使っている計算センターを組織化したことですよ。

六六年に発足したFACOM電子計算センター協議会がそれでね。小林大祐さんを表に立てて、実際は彼が事務局を運営したんです。その貢献がなかったら、のちのFACOMセンター協議会（FCA）の基礎はできなかつた」

FACOM電子計算センター協議会（二〇二三年現在の名称は「富士通系情報処理サービス業グループ」というのは、富士通の電子計算機を使って受託計算サービスを提供した企業の団体である。発案者は協栄計算センター（のち「アイネス」と改称）の狩野健司だったとされる。

発足時は首都圏の六社だったが、富士通製電子計算機の普及とともに会員が全国に広がった。富士通はそのパワーを活用して、農業センサス、漁業センサスなど国が実施する全国規模の一斉調査を受託して、公共分野の地歩を固めることができた。

その経験を生かして協議会加入の各社は、大手企業から受託した計算業務を分業で受注する一方、共通の情報処理技術者育成カリキュラムを作成するなど、わが国情報サービス産業の基盤形成を牽引した。この仕事も名木田、田部のコンビが差配することになった。

田部雄三はこのち日本電波塔（東京タワー）の前田久吉に請われ、日本EDPに移って専務、のち副社長を歴任した。

日本EDPは主要な国産電子計算機を揃え、電波を利用した無線オンラインサービスを計画したことで知られる。

日本能率協会のEDP研究室を吸収統合した関係から、鶴沢和昌（のち青山学院大学学長・一九一八～二〇一九）、中嶋朋雄（のち日本EDP専務）、中西忠男（のち株式会社ビッツを創業）、下川幸嗣（のち日本情報産業を創業）といった人材が集まっていた。

夢が先行し、投資がかさんだ。

前田が頭を痛めていた累積赤字を短期で解消するために、大胆なりストラを断行した。これがために業界での評判は決して芳しくなかつた。また、人を驚かせる突飛なアドバロオンを掲げることもなく、一九八〇年代には従業員三百五十人を数えるまでに規模を拡大している。

田部は二〇〇三年一月、七三歳で没した。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

FACOMセンター協議会 FCA…一九六六年五月、「FACOM電子計算センター協議会」の名称で発足した富士通のメインフレームを使って受託計算サービスを提供した企業の団体。発案者は協栄計算センター（のち「アイネス」と改称）の狩野健司だったとされる。発足時は首都圏の六社だったが富士通製コンピュータの普及とともに会員が全国に広がり、農業センサス、漁業センサスなど全国規模の一斉調査を分業で受注する一方、独自に共通の情報処理技術者育成カリキュラムを作成するなど、わが国情報サービス産業の基盤形成を牽引した。

FACOM100 富士通信機製造が開発した国産初の実用レリー式計算機。四千五百個のリレーを使い科学技術用として社内外の計算業務に利用された。湯川秀樹博士から依頼された多重積分計算は人手で二年かかるとされたが、このマシンは三日で完璧な答えを出した。

渡辺昭雄 わたなべ・あきお／1933…東洋工業（現・マツダ）から富士通信機製造に移籍し、小型計算機の設計に従事した。「FACOM23010」の名で発売され、ベストセラーとなった。一九七〇年代にFACOM Mシリーズが国産コンピュータの主力機となったとき、「コンピュータはもつと小型化する」と考えて独立、東京・八重洲口の前に「システムズ・フォーミュラート」という会社を設立して、現在のパソコンの原型となる八ビット・マイコン「BUCCOM-80」を製品化した。

有隣電機精機計算センター 一九五六年、東京・飯田橋駅前に創

立された国内初の商用計算センターだった。当時は「電気計算所」と呼ばれた。FACOM128の二号機が設置されていた。のち港区西新橋に移転した。

安藤 馨 あんどう・かおる／1814～1997。第二次大戦前、「日本ワットソン統計会計機械」に入り、日本の敗戦と同時に連合軍総司令部（GHQ）の戦略爆撃調査団に所属してパンチカード・システムによる各種統計を作成した。この人によって多くの日本人がGHQや在日アメリカ軍基地の情報処理部門に採用されている。のち日本IBMに入り、一九六〇年代には東京オリピックのオンライン・システム開発チームを統括しプログラマーの養成などに努めた。

日本EDP 産経新聞社創業者で元衆議院議員を務め、日本電波塔（東京タワー）社長だった前田久吉（まえだ・ひさきち／1893～1986）が「国内最大のコンピュータ・センター」を目指して、一九六六年（昭和四十一年）十二月、東京・芝公園の東京タワー内に設立した。国産メーカーの最新鋭機を揃え、受託計算とプログラム作成を中心に事業を展開した。日本能率協会のEDP研究室を吸収統合した関係から、鶴沢和昌、中嶋朋夫、中西忠男、下川幸嗣といった人材が集まっていた。



# 日本IT書紀 016 サムライ

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。